聖泉看護学研究　Seisen J. Nurs. Stud., Vol. 4. pp.47-54, 2015

資　　料

A 看護大学の基礎看護学実習Ⅱにおける学生の学びの分析

Analysis of that Learning for the Student at A Nursing University in the Basic Nursing Practicum Ⅱ

千田　美紀子[1)]*，今井　恵[1)]，松永　早苗[1)]，井上　美代江[1)]，
Mikiko Senda，Megumi Imai，Sanae Matsunaga，Miyoe Inoue，
辻　俊子[1)]，井下　照代[1)]，上野　範子[1)]，森下　妙子[1)]
Toshiko Tsuji，Teruyo Inoshita，Noriko Ueno，Taeko Morishita

キーワード　基礎看護学実習Ⅱ，学生，学び，分析
Key Words　the basic nursing practicum Ⅱ，students，learning，analysis

抄　録

背景　看護学において，実習は多くの看護実践を経験する学びの場となる．中でも基礎看護学実習での体験は，学生が看護学を学んでいく過程において，意欲や関心を高めるために影響力が大きい．

目的　基礎看護学実習Ⅱ終了後に提出した，課題レポートに記載されている学生の学びを明らかにする．

方法　対象は，A 看護大学２年生の学生48名とした．学生が提出した課題レポートの内容から，学びに関連するデータのコード化を行い，さらにサブカテゴリー，カテゴリーを抽出した．

結果及び考察　学生は，看護には，【患者のニーズに沿う安全・安楽な看護援助】や，【患者の個別性と自立性を考えた看護過程の展開】が必要であることを学んでいた．【コミュニケーション技法と患者に与える効果】，【患者に寄り添う看護】は，看護師の高い看護技術を観察していた．【チーム医療の実践】，【看護者に求められる実践に必要な能力】は，医療チームの調整役である看護師の役割を学んでいた．さらに【看護師の仕事のやりがい】を学び，未来の自分を見据えて看護師と接していた．

結論　学生の学びとして，７つのカテゴリーが抽出できた．学生自身が経験するだけでなく，看護師が行うコミュニケーションを観察することにより，看護師の高度な個別性を踏まえた看護技術が学べた．

Ⅰ．緒　言

看護学における臨地実習は，学内で学んだ知識と技術を統合し実践する重要な授業過程といえる．客観的･論理的に説明できないこの「経験」が，人間関係を基盤とする看護では重要な意味を持つことが多い（藤岡，尾宜，2004）と述べられているように，実習は多くの看護実践を経験する学びの場となる．中でも基礎看護学実習は，初めて患者や看護師と触れ合う実習である．この実習での体験は，その後の学習意欲や看護観，職業観の形成に大きな影響を与える（滝下，上野，1996）．すなわち，臨地実習における基礎看護学実習での体験は，今後，学生が看護学を学んでいく過程において，意欲や関心を高めるために影響力が大きい．

基礎看護学実習に関する文献は，学生の思いに関するもの（岡田，桝本，2011；目時ら，2008；井村ら，2008）や，技術（鶴田ら，2013;杉本ら，2011；佐藤ら，2008），目標達成や評価（冬木，2011；滝下ら，2008）など，多くある．中には，学生の学びを分析したものもあるが（河相ら，2011；平塚ら，2011；渡邊ら，2008；杉本ら，2004），「学んだ内容」をテーマとして挙げ，学生自身が学んだことを意識化し記載するレポートから，学びの抽出をしたものは見られなかった．

そこで，A 看護大学の基礎看護学実習Ⅱにおいて，「学んだ内容」をテーマとしたレポート課題を課し，そこに記載されている学びを明らかにすることにした．A 看護大学開設後，初めての基礎看護学実習Ⅱであり，教員は，実習準備や内容に不安を抱えながら実施したため，看護過程が十分展開できたか不安であった．今回，学生の学びを明らかにすることにより，今後の看護過程の演習や，臨地実習の在り方について検討する．

[1)] 聖泉大学　看護学部　看護学科　School of Nursing，Seisen University
* E-mail　senda-m@seisen.ac.jp

Ⅱ．A看護大学の基礎看護学実習Ⅱの概要

1）基礎看護学実習Ⅱの位置づけ

A看護大学の基礎看護学実習は，一年次に1単位45時間と二年次に2単位90時間を履修する．基礎看護学実習Ⅰは，一年次前期に基礎看護論Ⅰと生活援助論を履修後，前期末に見学実習として実施される．そして，一年次後期から二年次後期にかけて生活援助技術論Ⅰ・Ⅱにて生活援助の実施を行い，看護過程論や基礎看護論Ⅱにて看護過程や看護管理を履修した後，基礎看護学実習Ⅱへつながっている．

2）基礎看護学実習Ⅱの内容

基礎看護学実習Ⅱでは，2週間にわたり，学生が患者を受け持ち，看護過程を用いてその人にあった生活援助の実施を行う．実習の目的は，入院生活を送る対象者を理解し，その人にあった看護援助を実施・評価・考察し，問題解決過程の方法を習得すること，看護援助を通して生命とは何か，生命の尊厳，倫理観等を洞察することである．実習1週目に，受け持ち患者の情報を収集し，解釈を行い，看護問題を抽出し，援助計画の立案まで行う．実習2週目には，計画した看護援助を実施し，評価・考察を行う．

また，実習終了後に，看護過程を記録した用紙と共に，レポートの提出を課題とした．レポートは，実習中に学んだ内容についてテーマをあげ，その内容・評価・考察・まとめ等を記入し，1600字程度にまとめるものとした．テーマは，学生個々が学んだと意識化した内容を示すものとして，自由に設定させた．

Ⅲ．方　法

1．研究デザイン

本研究は，学生のレポートを用いた質的記述的研究法とした．

2．研究対象者

2013年に基礎看護学実習Ⅱを履修したA看護大学2年生48名．

3．調査期間

2013年3月～4月．

4．研究方法

学生が，基礎看護学実習Ⅱ終了後に提出した自由記述式レポート（以下，レポートとする）の記載内容を分析対象とした．

5．分析方法

1）レポートを繰り返し読み，記載内容の意味が損なわれないように，レポートの全文を単文化した．
2）その単文から，学生の学びに関連したデータをコード化した．
3）抽出したコードを検討し，類似するものをサブカテゴリーに分類後，中心となるカテゴリーを抽出した．
4）研究の目的に沿って，学生の学びに関連するデータであることを確認した．
5）分析は，共同研究者間で合意を得るまで検討を行った．

6．倫理的配慮

研究協力の依頼については，実習が終了し，成績が出された後で，記録の返却時に口頭による説明を行った．その際，プライバシーの保護と守秘義務の遵守，得られたデータは研究目的以外に使用しないこと，自由意思による研究参加，辞退による不利益がないこと，同意後であってもいつでも中止できること，成績には無関係であることについて説明し，同意書に署名を得た．同意が得られた学生のレポートは，個人が特定できないように匿名化をはかるため，氏名の記載を消去したものをコピーし，その後に返却した．紙媒体のデータやデータを保存したUSB，またはそれを処理するパソコンは，鍵のついた場所に厳重に保管した．データの処理に使用するパソコンは，主任研究者の責任の下に管理し，厳格なアクセス権限の管理と制御を行うことにより，厳重に保管，取り扱うものとし，安全管理の徹底を図った．

研究は，基礎看護学実習Ⅱの開始前に，A大学研究倫理委員会の審査を受け，承認を得た（平成25年3月8日受付，第15号）．

Ⅳ．結　果

実習を行った2年生の学生59名に研究の協力を依頼し，48名（回収率81.4％）から同意が得られた．

表１　基礎看護学実習Ⅱにおける学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー（コード数）
患者のニーズに沿う安全・安楽な看護援助	安全・安楽を考えた援助　(6) 患者が求める援助の提供（12）
コミュニケーションが患者に与える効果と技法の習得	コミュニケーションの技法（8） コミュニケーションの効果（3）
患者の個別性と自立性を考えた看護過程の展開	看護師に必要な効果的な情報収集の方法（16） 患者の必要不可欠な情報を取捨選択し、看護計画に立案（7） 患者一人ひとりを考えた看護計画の実施（27） 患者の自立を促すケアの計画、実施評価（11） 患者の反応や病態の経過を考察し看護計画を修正（6） 看護過程の効果的な展開方法（6）
看護者に求められる実践に必要な能力	目的意識や根拠をもった行動（10） 看護者に求められる倫理（3） 病態生理学習面の強化（9） 看護の知識と技術は基礎と応用が大切（14）
患者に寄り添う看護	患者に寄り添い、気持ちを考える看護（19）
チーム医療の実践	チームとして患者の援助を実践（11） 患者情報をチームで共有し看護を実施（8）
看護者の仕事のやりがい	日常での経験が看護に生きる(3) 看護師として仕事への姿勢(5) 看護者の仕事のやりがい(5)

学生48名のレポートの内容から，学生の学びに関する189のコードを抽出した．それらを20のサブカテゴリーと７つのカテゴリーに分類した（表１）．以下に，基礎看護学実習Ⅱにおける学生の学びを各カテゴリー別に示す．文章中の【　】はカテゴリー,『　』はサブカテゴリー,「　」はコードを示す.

１．【患者のニーズに沿う安全・安楽な看護援助】

学生は,「援助を行う看護師と患者に声掛けをしながら行うことで，息を合わせながら安全にスピーディーに援助できる」,「自分の役割に集中するばかりなく，お互いが作業を行いやすいように補助し，協力し合うことが患者にとっても安楽な援助につながる」,「患者の個別性･ニーズ･安全･安楽に沿った援助, 観察は基礎の基礎である」と，患者の『安全・安楽を考えた援助』について述べていた．また,「患者の心に寄り添い，患者が求めるケアを提供する」ことや,「患者が今求める援助を理解し，訴えを基に援助を計画して実施する」ことで,『患者が求める援助の提供』の必要性を学んでいた.

2．【コミュニケーションが患者に与える効果と技法の習得】

学生は,「患者の個別性に合わせたコミュニケーション方法をとることが必要である」,「急性期にある患者の状況に応じたコミュニケーションを図ることが重要である」と述べており，状況に合わせた『コミュニケーションの技法』が必要であることを学んでいた．そして,「ただ話をするだけでなく隣に寄り添うだけでも信頼関係が作れる」,「声かけによって疼痛の軽減になることを看護師を通して学んだ」と述べており,『コミュニケーションの効果』について学んでいた.

3．【患者の個別性と自立性を考えた看護過程の展開】

学生は,「患者の表情や反応を観察する」ことや,「患者と何気ない会話の中で重要な情報を得る大切さ」を述べており,『看護師に必要な効果的な情報収集の方法』を学んでいた．そして,「ただ単に情報を集めればいいのではなく，計画に活かすために必要な情報に的を絞って聴くことが大切」と『患者の必要不可欠な情報を取捨選択し，看護計画を立案』する必要性を学んでいた．また,「状態の変化に柔軟に計画を修正して援助できるように，援助の場面を想像して立案する必要がある」と述べているように,『患者一人ひとりを考えた看護計画の実施』の大切さを学んでおり,「原理・原則を踏まえたうえでその患者にあった看護計画を立てることのむずかしさ,大切さを知った」と述べている．また,「患者が自分でできることは何かを考え,計画や援助に取り入れていく」と,『患者の自立を促すケアの計画，実施評価』についても述べている．しかし，計画したケアの実施だけでなく,「患者の体調をきちんと把握してその日に応じた援助をする必要がある」と述べており,『患者の反応や病態の経過を考察し看護計画を修正』する必要性を学んでいた．そして，そのためには,『看護過程の効果的な展開方法』が必要だと感じており,「個別性のある看護を提供するために，意図的に集めた情報を整理・分析・判断し，看護の方向性を決定することができる」ことを学んでいた.

4．【看護者に求められる実践に必要な能力】

学生は,「目的をもって観察や援助をしていくことが大切」,「何を行うにしてもプロセスを大切にし，根拠をもって行うことが重要である」と述べており,『目的意識や根拠をもった行動』が看護師にとって必要な能力であると学んでいた．また,「医療従事者という人の命に携わる仕事に改めて責任感を感じることができた」,「生命の尊厳や倫理を実習最終日に考えられた」と述べており,『看護者に求められる倫理』についても学んでいた．そして,「病態生理をよく理解しないと関連図から統合・分析まで広がらなかった」,「看護に関する知識不足を何度も実感した」,「基本的な技術が身についてないと，応用の技術ができない」という経験をしていた．それにより,『病態生理の学習面の強化』や『看護の知識と技術は基礎と応用が大切』が必要であると学んでいた.

5．【患者に寄り添う看護】

学生は,「患者に寄り添うことで苦痛やそのつらさを分かち合えることだと気付いた」,「個別性を重視した看護の提供には，患者に関心をもち心に寄り添うことが大切である」,「相手を知りたいのなら，心から相手に関心もつことが大切」と述べており,『患者に寄り添い,気持ちを考える看護』を学んでいた.

6．【チーム医療の実践】

学生は,「チームで患者を看護していくことは，患者を思いやる事であり，患者に苦痛を与えず安楽につながる」,「看護師としてチーム医療の中でどう動くべきなのかを学べた」と述べており,『チームとして患者の援助を実践』することを学んでいた．また,「看護師の誰が見ても理解できるような看護計画を立案していくことで共通の援助が実施でき，患者にとって最も必要な看護が行える」,「患者の発言や細かい動作までもしっかり記録に残す」と,『患者情報をチームで共有し看護を実施』する必要性を学んでいた.

7．【看護者の仕事のやりがい】

学生は,「日常生活の中で様々な体験をしていることを頭に書きとめ，良いと思った援助を取り入れ，他の看護師の考えなどからも吸収してさらに良い援助にする」,「普段の生活の中で楽しかったこと，哀しかったこと，快，不快を忘れずに看護に生かしていきたい」と感じており,『日常で

の経験が看護に生きる』ことを学んでいた．また，「何事においても学ぶ姿勢は積極的でなければ何もはじまらない」，「患者に元気を与えられるように，大変な仕事の中でも明るく元気に患者に接していく」と述べており，『看護師として仕事への姿勢』を学んでいた．その中で，「看護師は患者とかかわっていく中でその笑顔や言葉から元気ややる気をもらっている」，「看護師にしかできないことがたくさんある」と，『看護者の仕事のやりがい』を学んでいた．

Ⅴ．考　察

学生は，看護には，【患者のニーズに沿う安全・安楽な看護援助】や，【患者の個別性と自立性を考えた看護過程の展開】が必要であることを学んでいた．これは，講義で学習した援助の原則についての学びを，実習での経験から再構築できたといえる．基礎看護学実習Ⅱで学生は初めて受持ち患者を担当し，その人に必要な看護は何かを考え，援助を提供するという経験をする．学生の実践する看護技術は未熟であり，カテゴリーに抽出できたような援助を行うことは難しい．しかし，看護師と患者のやりとりを見学することで，コミュニケーションの工夫や患者の個別性への対応，看護師としての姿勢など看護とは何かということをより具体的に語ることができるようになっていたことが明らかになっている（伊藤ら，2009）．今回の実習でも同様に，学生自身の技術が未熟であり，思うように援助が行えなかったとしても，看護師の実践する看護から，看護援助には安全・安楽・自立・個別性が必要であることを学んでいたといえる．

また，コミュニケーションに関しては，学生は言語的コミュニケーションに着目することが多い傾向にあると考えられる．しかし，実際に患者とコミュニケーションを図る時には，言語だけでなく，ただその場にいる，患者に寄り添うということが信頼関係につながり，苦痛が軽減することを学んでいた．学生自身が経験するだけでなく，看護師が行うコミュニケーションを観察することにより，【コミュニケーションが患者に与える効果と技法の習得】や，【患者に寄り添う看護】といった看護師の高度な看護技術が学べた．厚生労働省の看護基礎教育に関する報告書（2007）においても，看護技術にコミュニケーション技術は欠かせないものとして位置づけられており，これは，実習という経験で，より具体的な技術の習得ができたといえる．

さらに，厚生労働省の看護基礎教育に関する報告書（2007）では，他職種と連携・協働しチーム医療の中で看護の役割を果たしていくことについて述べている．今回の学生のレポートの中からも，【チーム医療の実践】のカテゴリーが抽出できた．学生は，他職種が連携していくには，医療チームの中での看護師の役割が重要であると学んでいた．また，看護師は人の命に携わる仕事であるということを意識し，責任感を感じているという【看護者に求められる実践に必要な能力】についても学んでいた．そのためにも，病態生理などの知識や，基礎的な技術能力が必要であることも感じていた．岡田ら（2011）は，学生が実習で自分自身の看護実践がまだまだ不十分であると振り返ることは，学生が自分を客観的に評価し，今後につなげようと前向きに捉えている表れであると述べている．看護実践を振り返ることは，達成動機を高め，学習活動能力を高める一要素であることも岡田ら（2011）は報告している．今回分析したレポートからも，同様の内容が読み取れ，看護師はチーム医療の一員であり，生命の尊厳について考え，求められる倫理を学んだことは，今後の学習意欲向上につながる動機づけになるといえる．

さらに，【看護師の仕事のやりがい】では，「日常生活の中でいろいろな体験をしていることを頭に書きとめ，良いと思った援助を取り入れ，他の看護師の考えなどからも吸収してさらに良い援助にする」，「普段の生活の中で楽しかったこと，哀しかったこと，快，不快を忘れずに看護に生かしていきたい」と感じていた．学生は，実際に看護師から話を聞くことにより，日常の生活が看護に生きることを学んでいた．大橋ら（2008）は，看護学生の基本的な生活能力や常識が変化していると述べており，日常の経験も年々と変化しているといえる．しかし，実習でこのような思いを持つことにより，今まで何気なく過ごしてきた日常の中にも記憶に残ることが増え，看護の視点で物事が考えられる能力が身についていく．また，「何事においても学ぶ姿勢は積極的でなければ何もはじまらない」，「患者に元気を与えられるように，大変な仕事の中でも明るく元気に患者に接してい

く」という仕事への姿勢を学んでいた．そして，「看護師にしかできないことがたくさんある」と述べており，未来の自分を見据えて看護師と接していたことが伺える．一年次の実習では，主に見学からの学びになるが，基礎看護学実習Ⅱでは学生自身が援助を行うため，その体験が目指す看護師像を具体的なものにしており，看護師という仕事のやりがいにつながったといえる．

しかし，今回分析したレポートの内容からは，看護を展開していく中で，看護上の問題の抽出などのカテゴリーが出てきていない．これは，【患者の個別性と自立性を考えた看護過程の展開】のカテゴリーに内包されているとも考えられるが，レポートからも，状態の変化，体調，病態などの言葉が目立ち，目に見やすい病状の変化を捉えているような傾向がある．それに加え，看護援助の計画を立て，援助を行うことに精いっぱい力を注いでいることが影響していると考えられる．番所ら（2010）の研究では，学生が看護過程を展開する中で難しいと感じた内容はアセスメントであることを明らかにしている．特に今回は，初めて受持ち患者の看護過程を展開する実習であったため，患者を全人的に捉え，看護問題を抽出することが学びであると意識化できなかったと予測できる．今後は，身体的な側面も含め，様々な側面から情報を捉えられ，アセスメントする能力が身につけられるように指導することが課題である．

今回は，学生にレポートテーマを自由に付けさせたため，学生は自分のテーマに沿っての学びのみ記載していると考える．実習では，レポート記載以外の学びも多くあると思われる．したがって，今後，レポートテーマと学びの関係性を分析しながら，レポートテーマの自由設定の意義についても検討していく必要性がある．

Ⅵ．結　論

A 看護大学における基礎看護学実習Ⅱでの学生の学びを，質的記述的に分析した結果は，以下の通りである．

1．学生の学びとして，【患者のニーズに沿う安全・安楽な看護援助】，【コミュニケーションが患者に与える効果と技法の習得】，【患者の個別性と自立性を考えた看護過程の展開】，【看護者に求められる実践に必要な能力】，【患者に寄り添う看護】，【チーム医療の実践】，【看護者の仕事のやりがい】の７つのカテゴリーが抽出できた．

2．学生自身が経験するだけでなく，看護師が行うコミュニケーションを観察することにより，看護師の高度な個別性を踏まえた看護技術が学べた．

3．学生は，目指す看護師像を具体的なものにしており，未来の自分を見据えて看護師と接していた．

4．今回分析したレポートの内容からは，看護を展開していく中で，看護上の問題の抽出などのカテゴリーが出てきていない．今後は，身体的な側面も含め，様々な側面から情報を捉えられ，アセスメントする能力が身につけられるように指導することが課題である．

謝　辞

本研究にご協力頂きました学生の皆様に深く感謝いたします．

文　献

番所道代，筒井千春（2010）：看護学生が難しいと感じた看護過程の展開　アセスメントに焦点をあてて，兵庫大学論集，No.15，247-252.

藤岡完治，尾宜譜美子（2004）：看護教員と臨地実習指導者，医学書院，東京都.

冬木佳代子（2011）：学生の自己評価からみた基礎看護学実習Ⅱの目標到達状況，東京医科大学看護専門学校紀要，21（1），31-41.

平塚厚子，権田和江，菊地悦子（2011）：基礎看護学実習Ⅱ終了後の学生の意識化された学びの特徴，日本看護学教育学会誌，vol.21，197.

井村香積，高田直子，新井龍，他（2008）：基礎看護学実習Ⅱで体験した看護学生の思い　患者とのコミュニケーションを通して，滋賀医科大学看護学ジャーナル，6（1），46-49.

伊藤朗子，中岡亜希子，岡崎寿美子，他（2009）：早期体験実習の評価と学生の学びに関する基礎的検討，千里金蘭大学紀要，vol. 6，63-72.

河相てる美，一ノ山隆司，若瀬淳子，他（2011）：基礎看護学実習Ⅱにおける看護過程を展開した学生の学びの特徴，共創福祉，6（1）47-52.

厚生労働省（2007）：「看護基礎教育の充実に関する検

討会」報告書.
目時まゆみ，佐藤和子（2008）：基礎看護学実習Ⅱにおける学生の困難感，神奈川県立よこはま看護専門学校紀要，vol. 4， 1 - 6 .
岡田初恵，桝本朋子（2011）：基礎看護学実習Ⅱにおける実習過程に伴う看護学生の思い　達成動機が高まった学生を対象とした調査から，川崎医療短期大学紀要，vol.31， 7 -13.
大橋久美子，菱沼典子，佐居由美，他（2008）：看護大学入学生の生活体験，聖路加看護学会誌，12（２），25-32.
佐藤昌子，馬醫世志子，城生弘美（2008）：基礎看護学実習において学生が経験する看護基本技術についての研究「環境調整技術」と「バイタルサイン測定」，群馬パース大学紀要，vol. 6 ，71-79.
杉本幸枝，小野晴子，土井英子（2004）：基礎看護学実習Ⅱにおける看護過程の展開を中心とした学生の学びと指導の課題　実習記録の内容分析，新見公立短期大学紀要，No.25，81-88.
杉本幸枝，山本智恵子，土井英子（2011）：基礎看護学実習Ⅱにおける臨床での援助技術の困難さの実態，インターナショナル Nursing Care Research，10（４），99-105.
滝下幸栄，岩脇陽子，松岡知子，他（2008）：基礎看護学実習Ⅱの評価と課題，京都府立医科大学看護学科紀要，vol.17，93-99.
滝下幸栄，上野範子（1996）：基礎看護実習における学習内容の分析―実習終了後レポートの内容分析から―，京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要，６（１），33-41.
鶴田晴美，村上弘之，根岸京子，他（2013）：基礎看護学実習における看護技術経験の実態，東都医療大学紀要，３（１），40-47.
渡邊知佳子，野崎真奈美，横屋智明，他（2008）：基礎看護学実習Ⅱを体験した学生の初めての学び，東邦大学医学部看護学科紀要，No.21，18-25.